

算数科における個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実に向けた指導方法の一考察
～リアルタイムアンケートシステムを活用した授業実践～

令和3年度入学

熊本大学大学院 教育学研究科
教職実践開発専攻 教科教育実践高度化コース
元田 幹人

実践報告書要旨

本報告書は、4つの章からなる。第1章では、本研究の背景として、Society5.0の転換期を迎えた現在において、どのような教育が求められているのかを考察している。その上で、学び続ける教師が目指されていることを取り上げ、本研究では授業改善の視点に焦点を当てる事を示している。授業における具体的な手立てとして、リアルタイムアンケートシステムを取り上げ、小学校算数科での活用事例が散見されないことを指摘している。これらを基に、研究の目的を授業における個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を目指す上で、リアルタイムアンケートシステムの利用が有効であることを授業実践での具体的な子どもの姿で示すこととしている。

第2章は、授業改善の視点として取り上げた個別最適な学びと協働的な学びを、先行研究を基に定義している。特に個別最適な学びに関しては、中央教育審議会（2021）に加えて、1970年代より実践された個別化・個性化教育の一環で、当時国立教育研究所の所員を務めていた加藤幸次氏によって提唱された指導の個別化・学習の個性化を参考にして定義をしている。協働的な学びに関しては、中央教育審議会（2021）を基に、「個別最適な学び」を「孤立した学び」に陥らせないために、一人一人のよい点や可能性を生かしていくための視点を踏まえて定義している。また、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実する上で重要な事項を、具体例を基にして明らかにしている。さらに、リアルタイムアンケートシステムの定義と、リアルタイムアンケートシステムの利用と個別最適な学びと協働的な学びを一体的な充実の関連について論じている。本研究では、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実していくために、教師だけがアンケート結果を閲覧して学習指導の最適化を目指すのではなく、子どもたちに回答結果を共有して個別最適に学習するための教具としていくことを述べている。

第3章では、第2学年「計算のくふう」における授業実践の子どもの学習の様子について述べている。授業でリアルタイムアンケートシステムを用いることで、アンケート結果を基に気づきを交流する子どもの姿を確認することができた。さらに、アンケート結果が新たな問題のきっかけになっている場面も見られた。これが、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実の視点における、リアルタイムアンケートシステムの有用性と言える。

第4章では、本研究の成果と今後の課題を示している。今後の課題では、リアルタイムアンケートシステムを活用した授業実践に向けた教材開発の視点として、オープンエンドの問題（島田、1995）を挙げている。